古文書と寺社・石碑にみる山形市蔵王上野の信仰

The Faith of Zao-uwano, Yamagata City Through Old Documents,
Temples, Shrines and Stone Monuments

竹原　万雄　TAKEHARA Kazuo
芦野　七海　ASHINO Nanami
加藤　彩花　KATO Ayaka
土井愛夕美　DOI Ayumi

要　旨

山形市蔵王上野地区は、瀧山西部の丘陵地帯に位置し、江戸時代は上野村であった。現在は「やまがたの棚田20選」に認定されており、江戸時代以来、山林と耕地を利用した生業形態であった。本学では、平成26(2014)年７月から同地区の古文書約1,900件を整理し、令和２(2020)年２月に『山形市蔵王上野文書目録』を刊行した。その過程で発見した古文書が、本稿でとりあげる『鎮守氏神并神仏堂宮々并供養石書上帳』である。同書には、明治３(1870)年段階に存在した寺社だけでなく石碑やその場所まで書き上げられていた。そこで本稿では、本史料を手がかりに、令和元(2019)年に実施した現代の寺社・石碑調査の成果を踏まえ、とくに蔵王上野の生業に関わる信仰について検討した。

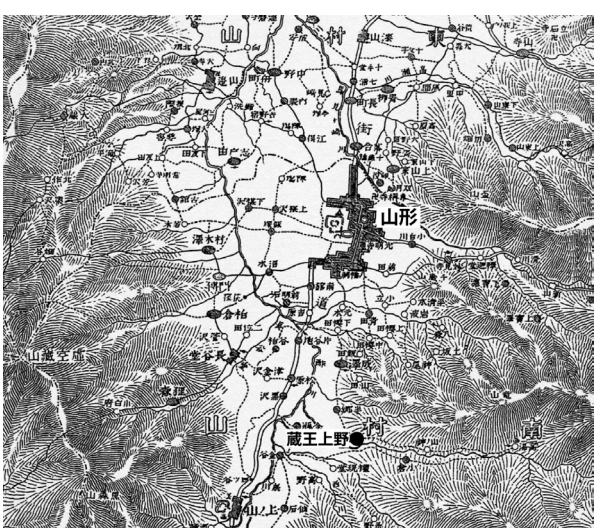
その結果、『鎮守氏神并神仏堂宮々并供養石書上帳』に書き上げられた寺社・石碑のほとんどが現存することを確認できた。また、寺社としては山神堂、石碑では湯殿山塔・蔵王山塔・子待供養塔・己巳弁天二世安楽供養塔・象頭山塔・水神堂において、農業や水・山といった蔵王上野の生業に関わる信仰がみられた。さらに、秋葉神社や古峯講の台帳からは、火防（火伏せ）や盗難除に加え、蚕の安全・養蚕繁昌の信仰もみられた。以上のことから、蔵王上野では150年以上前から、生業に関わる信仰が大切に受け継がれてきたことを明らかにした。

キーワード：山形市蔵王上野　古文書　寺社　石碑　信仰　生業

１．はじめに

本稿では、山形市蔵王上野（ざおうわの）地区に残された『鎮守氏神并神仏堂宮々并供養石書上帳』[1]を手がかりに、同地区の信仰について検討する[2]。蔵王上野は、瀧山西部の丘陵地帯に位置し（【図１】参照）、江戸時代は上野村であった[3]。江戸期の領主の変遷を確認すると、はじめ最上氏領、元和８(1622)年山形藩領、延享３(1746)年下総佐倉藩領、同４(1747)年陸奥棚倉藩領、宝暦13(1763)年から再び佐倉藩領となる。その後は、藩主・堀田正順（まさなり）の大坂城代就任に伴う村替により天明８(1788)年から寛政10(1798)年に幕府預地になる期間を除き、幕末まで佐倉藩領であった[4]。現山形市域は頻繁に領主がかわることが江戸期の特徴といえるが、蔵王上野も同様であった。

続いて、生業についてみると、寛永13(1636)年の保科氏



【図１】　山形市蔵王上野地区位置図
（「輯製二十万分一図　山形県全図」〈明治17年〉〔平凡社地方資料センター編『日本歴史地名大系　第六巻　山形県の地名』（平凡社、1990年）付録〕より作成）

領地目録では高949石余、元禄元(1688)年の免定によると高1,131石余、小物成として漆木役27貫１文・青苧役392文・山守役４貫400文などを上納していた。「天保郷帳」には1,018石余とあることから、江戸期を通して1,000石前後で推移したようである。18から19世紀の平均的な村高は400から500石といわれている[5]ことを考慮すると、比較的規模の大きな村であったといえるであろう。明治期以降は、明治11(1878)年に南村山郡に属し、同22(1889)年に堀田村の大字となる。その後、昭和25(1950)年に蔵王村の大字、昭和31(1956)年に山形市蔵王上野となり、現在に至っている。現在は、「やまがたの棚田20選」に認定されており、【写真１】のような景観が広がる。こうしてみると、近世以来の山林と耕地を利用した生業が、現在まで続いてきたといえよう。

蔵王上野には、地区で代々受け継がれてきた共有（区有）文書群である「山形市蔵王上野文書」が残されている。現在、上野ふれあいプラザ21敷地内の蔵に収蔵されており、本学では、平成26(2014)年７月から本文書群の整理を開始し、令和２(2020)年２月に『山形市蔵王上野文書目録』を刊行した[6]。その過程で発見した古文書が、本稿でとりあげる『鎮守氏神并神仏堂宮々并供養石書上帳』である。

同書には、明治３(1870)年段階に存在した寺社だけでなく石碑やその場所まで書き上げられている。それでは、明治３(1870)年に書き上げられた寺社や石碑にはどのようなものがあるのか。また、そこからどのような信仰がうかがえるのか。本稿では、同書を手がかりに、令和元(2019)年に実施した寺社・石碑調査の成果を踏まえ、とくに蔵王上野の生業に関わる信仰について検討したい。

〔竹原万雄〕

【写真１】　蔵王上野の棚田

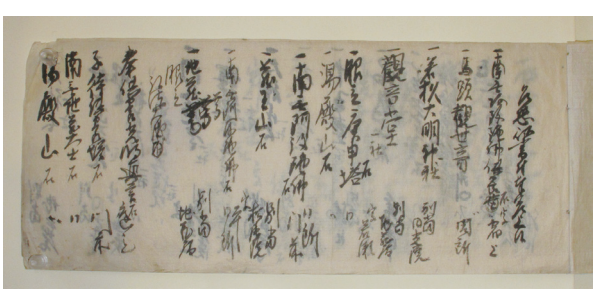
２.『鎮守氏神并神仏堂宮々并供養石書上帳』と寺社・石碑現地調査

まず、『鎮守氏神并神仏堂宮々并供養石書上帳』（以下、『神仏・供養石書上帳』と略す）の内容を確認したい。【写真２】は同書の表紙、【写真３】はその１丁目である。表紙には「明治三庚午年五月」「上野村」、冒頭には「乍恐以書付奉差上候」とあることから、明治３(1870)年５月に、役所からの指示によって上野村が作成し、提出したものとおもわれる。

『神仏・供養石書上帳』に記載されている情報を整理すると４点に分けられる。まず、寺社・石碑の名称が書かれ、その下または左右の空所に「一社」もしくは「石」と記してある。「一社」は寺社、「石」は石碑を指すものとおもわれる。その下に所在地が記され、さらに寺社・石碑の別当が書かれているものもみられた。例を示すと、「若杉大明神　一社　別当 日光院」、「蔵王山　石　別当 松尾院　字平」のような記載である[7]。

【写真２】『鎮守氏神并神仏堂宮々并供養石書上帳』表紙

一行が不揃いに書かれている列もあり、判断が難しいところもあるが、これらの情報をまとめ、書き上げられた寺社・石碑を一覧にしたものが【表１】である。「一社／石」「所在地」が確認できないものもあるが、合計36の寺社と石碑が書き上げられていた。また、「別当」については、現在の蔵王上野にある「地蔵庵」（地蔵寺）のほか、近隣の蔵王半郷地区にある「松尾院」や「日光院」、山形市緑町の「唯法寺」



【写真３】『鎮守氏神并神仏堂宮々并供養石書上帳』１丁目

【表１】『鎮守氏神并神仏堂宮々并供養石書上帳』に書き上げられた寺社・石碑一覧

No.	寺社名／石碑名	一社／石	所在地	別当
1	南無阿弥陀仏供養	石	字 宿上	
2	馬頭観世音		字 宿上	
3	若杉大明神	一社		日光院
4	観音堂	一社	字 若瀬	地蔵庵
5	脇立庚申塔	石	字 若瀬	
6	湯殿山	石	字 若瀬	
7	南無阿弥陀仏	石	字 若瀬　門前	
8	蔵王山	石	字 平	松尾院
9	南無阿弥陀仏	石	字 平	
10	地蔵尊			地蔵庵
11	脇立弘法大師	石ヵ		
12	奉供養光明真言	石	庭上	
13	子待供養塔	石	門前	
14	南無地蔵大士	石	門前	
15	湯殿山	石	門前	
16	天神宮	一社		地蔵庵
17	秋葉山大権現	一社	字 長森	日光院
18	脇立稲荷大明神	一社	字 長森	
19	脇立象頭山大権現	一社	字 長森	
20	阿弥陀堂	一社	字 堂上	松尾院
21	釈迦堂　太郎左衛門	一社	字 長森	
22	大神宮	一社		俗惣内
23	太子堂	一社	字 南坂	唯法寺
24	十王堂	石	字 龍口	久六
25	湯殿山	石	念仏車	
26	善光寺塔	石	念仏車	
27	弘法大師百八十八ヶ所供養堂	石	念仏車	
28	己巳弁天二世安楽供養塔	石	字 龍口	
29	百萬遍供養塔	石		
30	象頭山	石	字 南坂	
31	地蔵菩薩	石ヵ		
32	庚申堂	石	字 南坂	
33	南無阿弥陀仏供養塔	石	御蔵前	
34	大乗妙典供養塔	石		
35	山神堂	一社	字 板山	松尾院
36	水神堂	石	字 板山	地蔵庵

※『鎮守氏神并神仏堂宮々并供養石書上帳』に書き上げられた寺社・石碑の情報をまとめた。

があり、蔵王上野地区外を別当とする寺社・石碑があったことがわかる。

【表２】では、『神仏・供養石書上帳』に記載のある寺社・石碑の概要をまとめた。寺社に関しては、『山形県神社誌』[8]や『上野のあゆみ』[9]などを参考にした。石碑に関しては、それぞれの石碑に込められる一般的な信仰を『石仏調査ハンドブック』[10]や『山形の石碑石仏』[11]などからまとめた。なお、各寺社・石碑の詳細については、次章で検討する。

それでは、これら明治３(1870)年段階で書き上げられていた寺社や石碑は、現在も残っているのであろうか。そこで、令和元(2019)年に『ゼンリン住宅地図』[12]をもとに現地を歩き、発見した寺社・石碑の位置を地図に記録した。加えて、寺社・石碑をデジタルカメラで撮影するとともに、石碑についてはおおよその形状のスケッチと碑文や聞き書きの情報などをまとめた調査表（【写真４】）を作成した[13]。

このような現地調査から、『神仏・供養石書上帳』と現地で発見した寺社・石碑を照合したものが【表３】である。【図２】では、現地調査で確認した寺社・石碑の分布を示した。これにより、【表３】中の№11「脇立弘法大師」と№19「脇立象頭山大権現」以外の寺社・石碑を照合することができ、『神仏・供養石書上帳』に書き上げられている寺社・石碑のほとんどが現存することが明らかになった。なお、【写真７】には寺社・石碑の写真を掲載したので参照されたい。

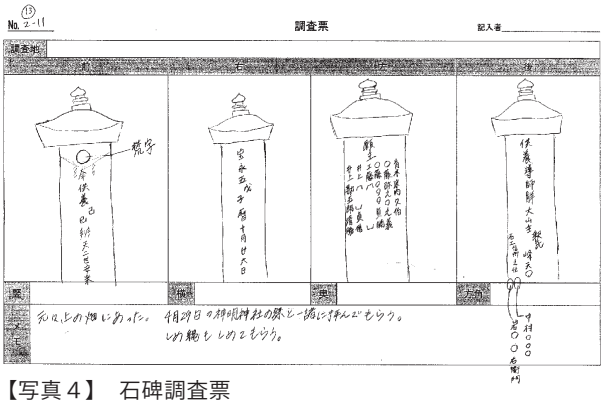
現地調査では『神仏・供養石書上帳』に書き上げられていない明治３(1870)年以降に建立された石碑も多数確認できた。そのうち、【図２】で示した「蔵王山神社大鳥居」付近には平成29(2017)年に建立された斎藤茂吉の歌碑、「字南坂」付近には昭和47(1972)年の金子てい・外村繁文学碑があり、蔵王上野にゆかりのある文化人の石碑がみられた。また、「蔵王上野の棚田」付近には、昭和56(1981)年に建立された「団体営圃場整備竣工記念碑」がある。このように、昭和・平成時代に文化人や生業に関わる石碑が建立されていた点にも留意しておきたい。

〔加藤彩花〕

３. 寺社・石碑からみる信仰

（１）寺社からみる信仰

本章では、『神仏・供養石書上帳』に書き上げられた寺社・石碑をめぐる信仰について検討する。



【写真４】　石碑調査票

【写真５】【写真６】　寺社・石碑現地調査の様子

まず、寺社からみてみたい。【表３】にあるように、『神仏・供養石書上帳』に記された寺社は11現存する。それぞれの概要については、先述したように刊行されている書籍などから【表２】にまとめた。

まず、寺院としては地蔵寺（№10）があり、「上野村には100戸近い農家があったが寺院は一つもなかったことから、村の集会で寺を建立することを決めた」という経緯で建てら

れた。『山形県寺院大総覧』[14]では、「地元の人たちの力によって建立されためずらしい寺である」と評されている。現在でも「村社」と称されているのが天神神社(№16)であり、学問の神・菅原道真を祀り、文教の神として氏子の崇敬が厚いという。

「山神堂」(№35)は、一般的に山の幸を与えてくれる神などとして祀られるが、聞き書きによると、蔵王上野では春に田の神としてお迎えし、秋にはお帰りになるとし、山の安全はもちろんであるが豊作の神としての意味合いも強くあるとのことであった。その他、火防(火伏せ)の神で名高い秋葉神社(№17)、「上野部落民の生活の安定と文化向上と人道の教化学をうけたまわり、部落民の悪病流行の防除などを祈願した」という太子堂(№23)からは、蔵王上野の人びとの生活と結びつく信仰がうかがえる。しかし、詳細がわからなくなってしまったものもあり、若杉大明神(№３)、若瀬観音(№４)、阿弥陀堂(№20)、釈迦堂(№21)、神明神社(№22)は不確定な情報も多く、具体的な信仰も不明瞭と言わざるを得ない。

そこで、蔵王上野に残された二種類の史料から、いま少し寺社の歴史や信仰を探ってみたい。第一は、『御尋ニ付書上帳』と題された、いわゆる「村明細帳」である。同書は、寛政11(1799)年８月[15]と天保９(1838)年閏４月[16]に作成された２冊が残っており、いずれも上野村の村役人から柏倉御役所へ提出された公的書類である。寛政11(1799)年は「沼溜井数并用水掛り善悪之事」にはじまり「旱水損之事」「秣場稲干場之事」「農業之外男女営并山野川稼之事」など生業に深く関わる項目が多いことが特徴である。一方、天保９(1838)年のものは村高や「御高札」「郷蔵屋敷」「家数」「人別」など村の概要に関する項目が書き上げられている。内容に差異はあるものの、どちらにも記載されている寺社の項目に注目したい。

そこで、両『御尋ニ付書上帳』に加え、明治３(1870)年の『神仏・供養石書上帳』と令和元(2019)年の現地調査から蔵王上野の寺社の変遷を示したものが【表４】である。この表から、寛政11(1799)年は、観音堂・地蔵庵・天神堂・秋葉山堂・しやか堂・神明堂・太子堂の７つの寺社があることや天保９(1838)年時点でも「しやか堂」が「釈迦堂」と書かれている以外は名称や数に変化がないことがわかる。それから明治３(1870)年には、若杉大明神・脇立稲荷大明神・脇立象頭山大権現・阿弥陀堂・山神堂が加わり、12に増加したことになる。令和元(2019)年までみると、名称が変化している点も興味深い。

但し、両『御尋ニ付書上帳』には書かれていないからといって、明治３(1870)年あるいは現存する寺社が両時代になかったとは言い切れない。実際、現在、山神堂とされる石

【表４】　上野村の寺社の変遷

№.	寛政 11(1799)年	天保９(1838)年	明治３(1870)年	令和元(2019)年
3			若杉大明神	(若杉大明神)
4	観音堂	観音堂	観音堂	若瀬観音
10	地蔵庵	地蔵庵	地蔵尊	地蔵寺
16	天神堂	天神堂	天神宮	天神神社
17	秋葉山堂	秋葉山堂	秋葉山大権現	秋葉神社
18			脇立稲荷大明神	(脇立稲荷大明神)
19			脇立象頭山大権現	
20			阿弥陀堂	(阿弥陀堂)
21	しやか堂	釈迦堂	釈迦堂	釈迦堂
22	神明堂	神明堂	大神宮	神明神社
23	太子堂	太子堂	太子堂	太子堂
35			山神堂	(山神堂)

※№.は【表１】と対応。寛政11年は「御尋ニ付書上帳(用水・田畑山林諸作物生業など村明細)」、天保９年は「御尋ニ付書上帳(村勢について)」、明治３年は「鎮守氏神并神仏堂宮々并供養石書上帳」、令和元年は現地調査の結果から作成。

祠には「文化五戊辰天九月吉日立之」とある。したがって、記載されなかっただけで存在した可能性もあるが、その場合、なぜ江戸時代の公的書類に記載されなかったのかという疑問が生まれる。このように、不明瞭な点もあるが、役所に提出された公的書類からわかる近世から近代にかけての寺社変遷の事例として紹介しておきたい。

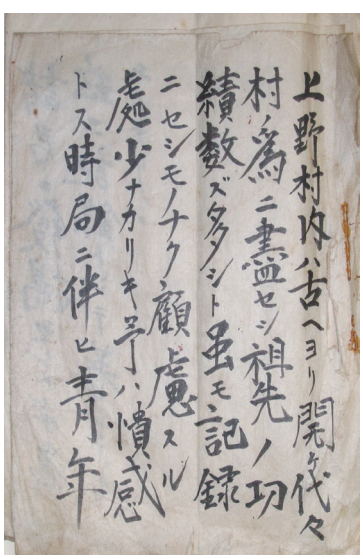
第二は、昭和5(1930)年4月21日に山口直治と山口良太によって記された冊子体の文書である[17]。【写真8】のように本書には題名がなく、冒頭には以下のようにある。

> 上野村内は古へより開け、代々村の為に尽せし祖先の功績数ず多しと雖も、記録にせしものなく、顧慮する処少なかりき、予は遺憾とす、時局に伴ひ青年諸君に発揚せしめんが為、茲に記録として著したるものなり

ここから、同書は上野村の祖先の功績を記録したものがないことを遺憾として作成されたことがわかる。加えて、「青年諸君に発揚せしめんが為」とあることから、村のために尽くした祖先の功績を知ることで、世に尽くす意識を高めることも目的としたのではなかろうか。

同書には、寺社の由緒を含め、蔵王上野の歴史が記されている。ここから、江戸時代において御堂などの建立時期や寺社に込められた祈りが読みとれるものを【表5】に整理した。御堂などの建立時期について【表2】と対照すると、天神神社・太子堂・秋葉神社の再建時期がより明確に記されている。また、寺社に込められた祈りとしては天下泰平・国土安全・家運長久など、【表2】にある『山形県神社誌』や『上野のあゆみ』などの情報よりも詳しく知ることができる。とくに秋葉神社については、天下泰平や火防だけでなく、盗難除けや蚕の安全といった人びとの生活により深く結びつく祈りが込められていたことがうかがえる。

〔芦野七海〕


上野村内ハ古へヨリ開ケ代々
村為ニ盡セシ祖先ノ功
績数ズ多シト雖モ記録
ニセシモノナク顧慮スル
處少ナカリキ予ハ憤慨
トス時局ニ伴ヒ青年

【写真8】 山口直治・山口良太の著書

【表5】 寺社の御堂等の建立時期と祈り

寺社名	御堂等の建立時期	祈り
天神神社	宝暦3(1753)年10月に御堂を建てた	天下大平・国土安全
若瀬観音	寛政5(1793)年9月13日に御堂を建て、観世音の木像を納めた	天下大平・組内安全
太子堂	享保12(1727)年10月22日に御堂を建て、元の仮御堂から太子の御姿を移した	家運長久
秋葉神社	宝暦10(1760)年8月に御堂を建てた	天下泰平・火難盗除・蚕安全
地蔵寺	延宝 8(1680)年に庵寺を建て、地蔵木像を納めた	安産

※山口直治と山口良太の著書より作成。

（2）石碑からみる信仰

続いて石碑をめぐる信仰についてみてみたい。【表2】からわかるように、『神仏・供養石書上帳』に書き上げられた石碑は15種類確認できる。1基のみが多いなか、「南無阿弥陀仏供養」(№1)、「南無阿弥陀仏」(№7・9)、「百萬遍供養塔」(№29)、「南無阿弥陀仏供養塔」(№33)と刻まれた、いわゆる「念仏供養塔」が5基を数える。そこで、これら5基の念仏供養塔からみてみたい。

【表6】は、【表3】から念仏供養塔の情報を抽出し、「石碑名」「年代」「関係者・団体」をまとめたものである。まず「年代」からは、建立時期が宝暦年間、とくに宝暦11(1761)年に集中していることがわかる。また、宝暦年間でいうと、【表2】の寺社にある天神宮(№16)、秋葉山大権現(№17)、大神宮(№22)の再建時期も同年間であることが目に付く。宝暦というと宝暦5(1755)年の飢饉が想起されるが[18]、このような時代背景が反映しているのであろうか。一方、聞き書きでは念仏供養塔には悪いものが集落に入ってこないようにする魔除けとしての意味があることもうかがっている。そのため、宝暦年間に集中している理由は定かではない。

続いて、「関係者・団体」をみると、全てに「講」が関係しており、講単位で建立されたことがわかる。『山形市史』には、百万遍の念仏を唱え、金を集めて南無阿弥陀仏や百万遍念

仏などの石碑を建立する観音講という団体についてとりあげられており[19]、蔵王上野の念仏供養塔建立に関わる講は、観音講のようなものであったと考えられよう。

なお、【図２】から念仏供養塔の分布をみると、５基のうち№１・７・９・33の４基が、「上野ふれあいプラザ21」から南東へ続く「宿（しゅく）」と呼ばれる地区に密集している点も興味深い。宿は、「若瀬（わかせ）」「平（たいら）」など、さらに細かい地名で呼ばれているが、それぞれの分布を【表１】からみると、№１は「字宿上」、№７は「字若瀬」、№９は「字平」、№33は「御蔵前」とあり、宿内の細かな地区ごとに置かれていたことがわかる。先述した魔除けの意味合いが反映された分布がうかがえるが、密集する正確な理由は伝わっていない。

念仏供養塔の次に多い石碑は「湯殿山」であり、３基を確認することができた。『山形市史』の調査によると、山形市域に「湯殿山」碑は292基あり、信仰碑のなかで最も多いという[20]。さらに、宝暦４(1754)年・安永４(1775)年・同６(1777)年・天明２(1782)年・同６(1786)年・寛政元(1789)年・同11(1799)年・享和３(1803)年・文政２(1819)年・同３(1820)年・同12(1829)年・天保８(1837)年・同12(1841)年・同15(1844)年・嘉永６(1853)年などの年号の石碑が多く見受けられ、凶作またはその翌年の年号のものが多いことから、豊作を祈願して湯殿山を参詣し、その記念として建立したと考えられている[21]。蔵王上野の「湯殿山」碑も安永３(1774)年、享和３(1803)年、嘉永６(1853)年と、他の地域と同様あるいは近い年に建立されており、豊作祈願の祈りが込められているのかもしれない。なお、【表３】から「関係者・団体」をみると、「講中」「八日講中」とあるように、講があったこともうかがえる。

このように石碑の建立と深い関わりのある講であるが、蔵王上野に残された『下野國上都賀郡古峯神社講臺帳』[22]からは古峯講の存在も確認できる。古峯神社は栃木県鹿沼市草久（くさぎゅう）にあり、天狗信仰が盛んなことから古峯（こぶ）が原天狗とも呼ばれる[23]。火防・盗難除け、海上安全、五穀豊穣など信仰の幅は広いが、とくに火防の信仰が強い。江戸時代中期より講組織が生まれ、代参形式で参詣が行われており、講は北海道から甲信越地方にまで及んでいる。

『下野國上都賀郡古峯神社講臺帳』は、「南村山郡堀田村大字山ノ神・上野講中」が明治36(1903)年に作成したものである。冒頭には、次のようにある。

> 下野国上都賀郡古峯神社、盗火難・悪魔消除、家内安全、養蚕繁昌、大願成就のため講社を結ひ、壱ヶ年に春秋二回、一回に付弐名つゝ代参として金八円、弐拾壱年間年々奉御神納候に付、其講中の為め別紙の通り規約するもの也

ここから、蔵王上野では、盗火難・悪魔消除、家内安全、養蚕繁昌、大願成就のために講を結んでおり、１年に春秋２回、１回につき２名ずつ代参して８円を神納することを21年間続けてきたことがわかる。台帳には、続けて講の規約と講中人名が列記されている。さらに人名上部には、代参日が記載されており、明治36(1903)年から大正10(1921)年の間に約70名が代参していた。

なお、蔵王上野には代参であるかは不明であるものの、参詣した記念に建てたとおもわれる石碑として善光寺塔（№26）と弘法大師百八十八ヶ所供養堂（№27）がある。【表３】の「関係者・団体」をみると、「施主　圓七妻　セハ 山ノ神 九良兵エ」「願主　円七妻」とあることから、どちらも円七の妻が関わっていたことがわかる。その他、【表３】からは、脇立庚申塔（№５）、子待供養塔（№13）の建立にも講が関わっていたことが確認できる。

続いて、「湯殿山」碑同様、蔵王上野の生業に関わる石碑をみていこう。まず、「象頭山」（№30）の石碑をとりあげたい[24]。金毘羅信仰は山岳信仰が土台をなしており、金毘羅神は人

【表６】「念仏供養塔」関連石碑情報一覧

No.	石碑名	年代	関係者・団体
1	南無阿弥陀仏供養	宝暦 11(1761)年 9 月 1 日	講中廿人
7	南無阿弥陀仏	宝暦 11(1761)年 7 月 15 日	講人中
9	南無阿弥陀仏	宝暦 11(1761)年 10 月 15 日	百萬遍供養講中
29	百萬遍供養塔	宝暦 7(1757)年	講中
33	南無阿弥陀仏供養塔	宝暦 10(1760)年 10 月	講中

※【表3】から「念仏供養塔」に関連する石碑の情報を抽出した。

びとに畏怖の念を抱かせる荒ぶる神であったという。しかし、後世、庶民の願いが多様になると、農民にとっては恵みの雨をもたらす竜神の住む山としての信仰なども加わるようになる。このように、次第に現世的な性格を強め、海上安全だけでなく豊穣・商売繁盛を約束する神として漁民や農民をはじめ、相場師から水商売人にまで広く信仰されて行った。蔵王上野では、恵みの雨、豊穣を祈っての信仰であったとおもわれる。

次は、「蔵王山」（№８）の石碑である。水利の神としての蔵王山に対する農民の感謝の碑とされるが、蔵王信仰においても講の存在がうかがえ、「蔵王山」碑のほとんどは講中によって建立されているという[25]。【表３】の「関係者・団体」をみると、「平若者中」とあり、石碑が存在する平地区の若者組のような団体が関係したことがうかがえる。石碑には「村中安全」と刻まれており、農業に対する安全を願ったものと考えられる。

「己巳弁天二世安楽供養塔」（№28）は巳待塔である[26]。【表２】にもあるように、巳待は、巳の日に講の人が集まって深夜まで精進供養をし、身の安全、作物の豊穣などを祈ることで、とくに己巳の日に行われたことが多かった。巳の日は弁才（弁財）天の縁日で、巳待には弁才天を本尊として祀る習俗があった。弁才天はインドの水の神であり、農業神であったが、さわやかな流水の音と関連して音楽、雄弁、学芸などの神として尊崇された。江戸時代には七福神の紅一点として富貴の神となり、農家では水の神、商家では財の神、一般に芸能の神として広く尊ばれた。塔には現世と来世に安楽を得る「二世安楽」と刻まれているが、作物の豊穣・水の神とも関わって、巳待に思いを託したのではなかろうか。

その他、「子待供養塔」（№13）の子神は農家では生産の神とされ、「水神堂」（№36）の水神も飲用水や灌漑水のような生命の泉としての水神と関わるとおもわれる。このようにみると、蔵王上野には生業に関わる石碑が多くみられることがわかるであろう。

〔土井愛夕美〕

４．おわりに

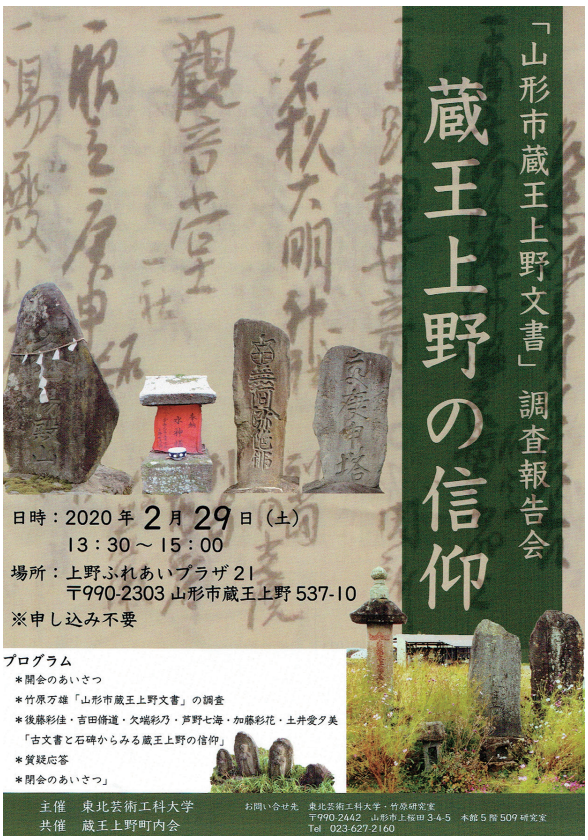
本稿では、明治３(1870)年に作成された『神仏・供養石書上帳』を手がかりに、令和元(2019)年に実施した現代の寺社・石碑調査の成果を踏まえ、とくに蔵王上野の生業に関わる信仰について検討した。その結果、『神仏・供養石書上帳』に書き上げられた寺社・石碑のほとんどが現存することを確認できた。また、寺社としては山神堂（№35）、石碑では湯殿山（№６・15・25）・蔵王山（№８）・子待供養塔（№13）・己巳弁天二世安楽供養塔（№28）・象頭山（№30）・水神堂（№36）において、農業や水・山といった蔵王上野の生業に関わる信仰が多くみられた。秋葉神社（№17）や古峯講の台帳からは、火防や盗難除に加え、蚕の安全・養蚕繁昌の信仰があったことも明らかとなった。

寺社・石碑の現地調査では、明治３(1870)年以降に建立された石碑も確認でき、生業との関わりでいえば「団体営圃場整備竣工記念碑」が棚田のなかに堂々とそびえ建っている。また、斎藤茂吉の歌碑や、金子てい・外村繁文学碑にみられるような、蔵王上野にゆかりのある文化人の石碑が建立されていた。文学・文化といえば、天神神社（№16）は文教の神を祀り、太子堂（№23）は文化向上の祈りが込められていた。

こうしてみると、150年以上前からの信仰がどこか現代にもつながっていることがうかがえる。寺社や石碑に込められた思いを後世まで守り伝えていこうとする心は、現在の蔵王上野の人びとにも脈々と受け継がれているといえるのではなかろうか。

なお、本稿は令和２(2020)年２月29日に開催予定であった「「山形市蔵王上野文書」調査報告会　蔵王上野の信仰」の報告内容をまとめたものである（【写真９】）。報告会は、新型コロナウイルス感染症の流行で、開催直前に中止となってしまった。本来であれば、蔵王上野の皆様からご意見をいただき、より充実した内容で本稿をまとめたかったが、それは叶わなかった。結果、不明瞭な点が多いままの脱稿となってしまったが、本稿を通して改めて蔵王上野の信仰を振り返る機会になれば幸甚である。

〔竹原万雄〕



【写真９】「「山形市蔵王上野文書」調査報告会　蔵王上野の信仰」のチラシ

【付記】

本稿執筆にあたり、池野勇男氏・山口三千夫氏をはじめ蔵王上野地区の方々より多大なるご協力をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

1　「鎮守氏神并神仏堂宮々并供養石書上帳」〈宗教-１〉。「〈　〉」は、東北芸術工科大学・古文書調査会編『山形市蔵王上野文書目録』（東北芸術工科大学、2020年）で付した№。以下も同じ。

2　蔵王上野の寺社・石造物については、荒井進『山形の歴史年譜　いにしえの郷―上野―』（荒井進、2013年）でも紹介されているため参照されたい。

3　蔵王上野の概要については、特記しない限り「角川日本地名大辞典」編纂委員会編『角川日本地名大辞典　６　山形県』（角川書店、1981年）、平凡社地方資料センター編『日本歴史地名大系　第六巻　山形県の地名』（平凡社、1990年）を参照した。

4　幕府預地の期間については、木村礎・杉本敏夫編『譜代藩政の展開と明治維新―下総佐倉藩―』（文雅堂銀行研究社、1963年）を参照した。

5　渡辺尚志『百姓の力―江戸時代から見える日本』（柏書房、2008年）。

6　東北芸術工科大学・古文書調査会編『山形市蔵王上野文書目録』（東北芸術工科大学、2020年）。

7　史料引用は、旧字体は新字体、片仮名は平仮名に適宜改め、読点を付した。不明瞭な情報には「ヵ」を付した。

8　山形県神社庁五十周年記念事業実行委員会出版部編『山形県神社誌』（山形県神社庁、2000年）。

9　『上野のあゆみ』（上野地区生涯学習推進委員会、1989年）。

10　庚申懇話会『石仏調査ハンドブック』（雄山閣出版、1984年）。

11　武田好吉監修『無言の野の語部たち　山形の石碑石仏』（日本文化社、1992年）。

12　『ゼンリン住宅地図　山形県山形市①［南部］』（2018年）。

13　現地調査参加者は、後藤彩佳・吉田脩道（以上、本学歴史遺産学科2020年度卒業生）、欠端彩乃・土屋峻太・芳村日香里（以上、本学歴史遺産学科4年）、芦野七海・加藤彩花・鈴木佳奈・土井愛夕美・吉田麻鈴（以上、本学歴史遺産学科3年）、髙坂まな井（本学文化財保存修復学科3年）である。

14　山形県寺院総覧編纂委員会編『山形県寺院大総覧』（山形総合出版社、1969年）。

15　「御尋ニ付書上帳（用水・田畑山林諸作物生業など村明細）」〈村政-４〉。

16　「御尋ニ付書上帳（村勢について）」〈村政-９〉。

17　山口三千夫氏蔵。

18　山形市市史編さん委員会・山形市市史編集委員会編『山形市史　通史編　中巻』（山形市、1987年）。

19　前掲註（18）書。

20　山形市市史編さん委員会・山形市市史編集委員会編『山形市史　別巻２　生活・文化編』（山形市、1976年）。

21　前掲註（18）書。

22　「下野国上都賀郡古峯神社講台帳」〈宗教-３〉。

23　古峯神社については、「角川日本地名大辞典」編纂委員会編『角川日本地名大辞典　９　栃木県』（角川書店、1984年）、平凡社地方資料センター編『日本歴史地名大系　第九巻　栃木県の地名』（平凡社、1988年）を参照した。

24　象頭山については、野口一雄『山形県の金毘羅信仰』（原人舎、2004年）を参照した。

25　前掲註（11）書。

26　巳待については前掲註（10）書、弁才天は前掲註（11）書を参照した。

【表２】『鎮守氏神并神仏堂宮々并供養石書上帳』に書き上げられた寺社・石碑の概要一覧

社/石	No.	寺社名／石碑名	概要
寺社	3	若杉大明神	前九年の役後(1062年頃)、白狐が石に変わり、惣助所有の田のあたりで時々動いていた。惣助が怪しんで神のお告げを聞くと、若杉大明神を祀るよう告げられた。【①】
	4	観音堂	若瀬観世音。寛政5(1793)年の開眼と伝えられる。現在の観世音は、旧小倉道の庚申森に嘉永年間(1848~1854)に建設され、若瀬を中心に30名程度の講中であった。【②】
	10	地蔵尊	宝珠山地蔵寺。開基は貞享4(1687)年。上野村には100戸近い農家があったが寺院は一つもなかったことから、村の集会で寺を建立することを決めた。宗旨を決めるにあたり曹洞宗と浄土真宗で意見が割れたが、最終的に真言宗になった。宝幢寺に願い出て庵寺にしてもらい、明治44(1911)年に庵号から寺号に改められた。【②】
	16	天神宮	天神神社。応和 3(963)年に創立され、宝暦年間(1751~1764)に再建される。菅原道真を祭神とし、文教の神として氏子の崇敬が厚い。明治7(1874)年2月25日に村社に列する。【③】
	17	秋葉山大権現	秋葉神社。創立は不詳だが、宝暦年間(1751~1764)に再建される。龍山信仰が盛んな時に、登山口の一つとしてこの地に火神を祀り、火難災難の消滅を祈願した。【③】
	18	脇立稲荷大明神	一般的に、稲荷信仰はおもに京都市の伏見稲荷大社に寄せられる信仰で、稲荷神は稲を象徴する穀霊神・農耕神である。商工業が発達するにつれて、生業守護神・医薬の神・福神などへ変貌し、さまざまな祈願目的によって全国各地へ勧請された。【④】
	20	阿弥陀堂	阿弥陀様。言い伝えによると昔この場所で戦いがあり(年代不明)、その戦死者の霊を慰めるために建てられた。御堂は過去に火災にあい、現在の御堂は明治22(1889)年4月15日に再建された。【②】
	21	釈迦堂	不明。
	22	大神宮	神明神社。延宝年間(1673~1681)の創立と伝え、宝暦年間(1751~1764)に再建の棟札がある。【③】
	23	太子堂	聖徳太子の御願堂。享保年間(1716~1736)に再建される。上野部落民の生活の安定と文化向上と人道の教化学をうけたまわり、部落民の悪病流行の防除などを祈願した。【②】
	35	山神堂	一般的に、山は食料となる鳥獣や草木の実が豊富にあるほか、水の源泉であり、人間生活を維持する母胎であった。その山を支配するのが山神、山の幸を与えてくれるのも山神であるという観念から山神信仰がはじまった。【⑤】
石碑	1	南無阿弥陀仏供養	「南無阿弥陀仏」という念仏を唱えることで誰でも極楽往生できるという教えが広まる。個人や信仰団体で念仏を数多く唱えることが流行し、百万遍念仏などが行われるようになった。【⑥】
	7・9	南無阿弥陀仏	
	29	百萬遍供養塔	
	33	南無阿弥陀仏供養塔	
	2	馬頭観世音	馬の守護神として広く各地に行きわたっており、馬の息災と安全を願った。【⑥】
	5	脇立庚申塔	庚申信仰とは、庚申の夜、人体の三尸（さんし）という虫が人の睡眠中に抜け出して天帝にその人の罪過を告げ、天帝がその人の死期を早めるという。そこで、その夜は眠らずに一夜を送る「守庚申」を行い、それを7回続けると三尸は長絶とすると説くもの。この信仰の信者の集まりである庚申講の人びとが、庚申塔を建立するのが一般的なしきたりになっている。【⑥】
	32	庚申堂	

社/石	No.	寺社名／石碑名	概要
石碑	6 15 25	湯殿山	平安中期に修験道がおこり、出羽三山(月山・羽黒山・湯殿山)の信仰が成立する。室町時代までの三山は月山・羽黒山・葉山で、月山の本地は阿弥陀如来(未来世の化主)、羽黒山は観世音菩薩(現在世の導師)、葉山は薬師如来(過去世の教主)であり、三山を修行することで過去・現在・未来をのりこえ、大日如来の浄土である湯殿山に詣で、即身成仏の本懐を達するという。江戸時代には民間信仰の対象になり、修験者ではない一般の信者の登山が盛んになる。【⑥】
	8	蔵王山	水利の神としての蔵王山に対する農民の感謝の碑であり、蔵王山中から発する宮川・馬見ヶ崎川などによる水利地域に建碑され、須川以東に多くみられる。【⑦】
	12	奉供養光明真言	光明真言(こうみょうしんごん)とは真言密教で唱える呪文のひとつで、唱えると一切の罪業が消滅するといわれる。【⑥】
	13	子待供養塔	子待(ねまち)は 11 月の子の日の大黒天の祭りのことで、子神は農家では生産の神、商家では商売繁盛の神としている。【⑤】
	14	南無地蔵大士	地蔵菩薩は平安期に極楽浄土の信仰が盛んになるに伴い流行し、近世になってさらに民間信仰と結合し、庶民のあらゆる願いをかなえてくれる仏として祈願された。【⑥】
	31	地蔵菩薩	
	24	十王堂	十王は秦広王・初江王など冥途で亡者の罪を裁くという 10 人の王を言い、十王を安置した堂を十王殿という。【⑧】 十王堂も同様のお堂とおもわれる。
	26	善光寺塔	善光寺は、天台宗および浄土宗の別格本山である。再建に伴う善光寺聖の勧進活動と中世以降の浄土教の庶民化などにより全国的霊場へと急速に発展し、念仏信仰の一大中心地となった。【⑧】
	27	弘法大師百八十八ヶ所供養堂	百八十八ヶ所は、西国三十三ヶ所・坂東三十三ヶ所・秩父三十四ヶ所を合わせた百ヶ所に、四国八十八ヶ所弘法大師霊場の遍路を合わせたもので、巡礼成就供養として石碑が建てられた。【⑥・⑨】
	28	己巳弁天二世安楽供養塔	「己巳」は、己巳の日に講の人が集まって深夜まで精進供養をし、身の安全、作物の豊穣などを祈る巳待のことで、弁才天を本尊として祀る習俗があった。弁才天はインドの河神として尊崇され、仏教に取り入れられ、農業神や音楽や智恵の神に転じ、さらに福神の性格が強まり、七福神の一員に加えられている。【⑥】
	19	脇立象頭山大権現	仏教の金毘羅神は海神龍王などともいわれ、請雨者や遭難者の願いを聞く神として尊崇されている。この金毘羅神が香川県仲多度(なかたど)郡琴平町の象頭山に祀られている金刀比羅宮と融合し、金毘羅大権現となった。水神としても信仰される。【⑥】
	30	象頭山	
	34	大乗妙典供養塔	大乗妙典とは衆生を迷いから悟りの世界に導いてくれる教えを記した経典のことで、「大乗妙典塔」は大乗妙典を一定回数読誦を果たした記念などに建てられた。【⑥】
	36	水神堂	飲用水や灌漑水のような生命の泉としての水神、川端や飛滝の傍にまつる水害防除の神として信仰される。【⑤】

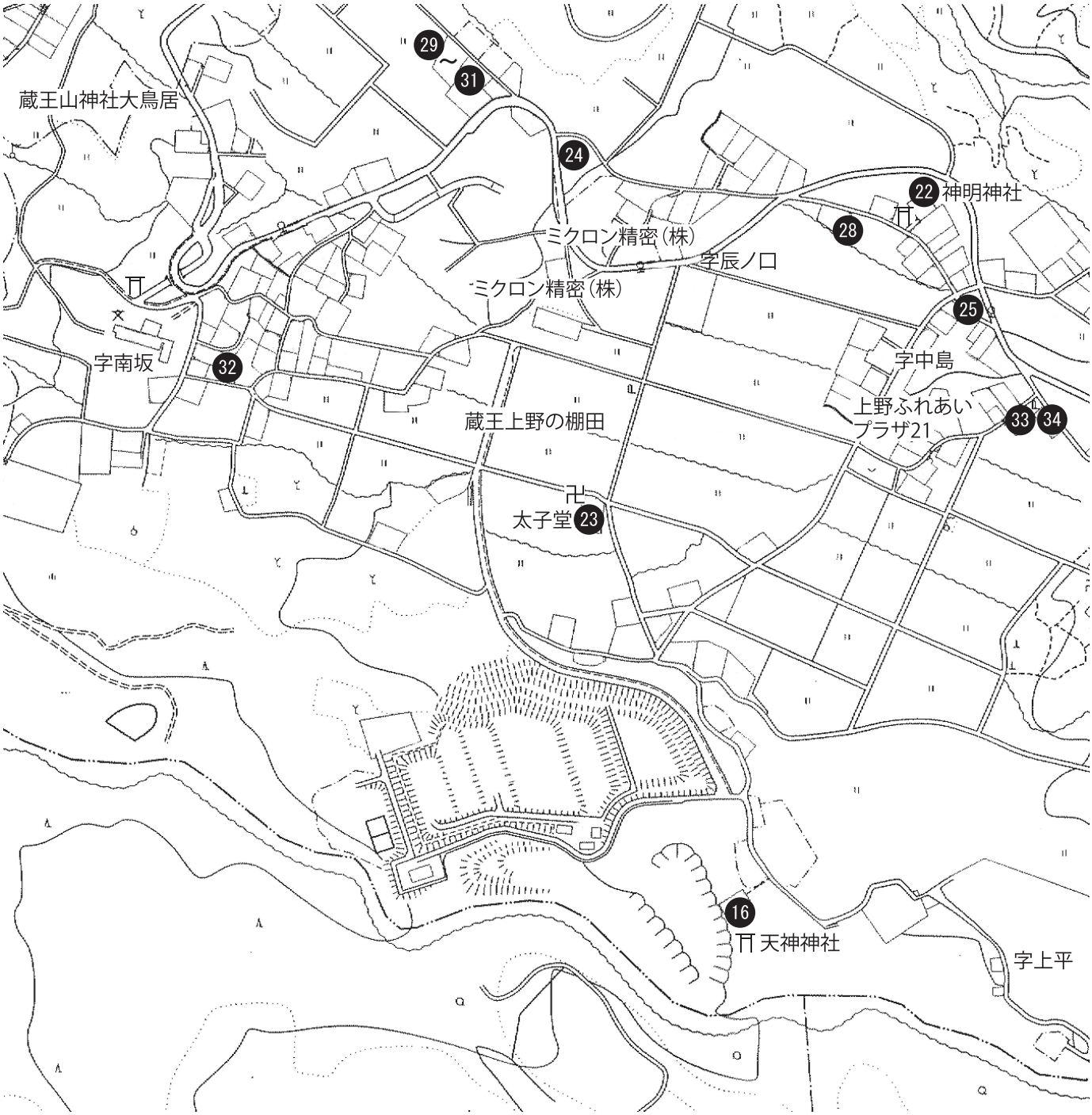
※『鎮守氏神并神仏堂宮々并供養石書上帳』に書き上げられた寺社・石碑の概要をまとめた。「No.」は【表１】と対応。【表１】で「一社／石」の記入がないものは、現地調査を踏まえて判断した。石碑のうち同様の信仰とおもわれるものは一つの項目にまとめた。但し、「脇立弘法大師」(No.11)は省略し、「脇立象頭山大権現」(No.19)は「一社」とあるが「象頭山」(No.30)の石碑の項目にまとめた。
「概要」にある【　】は参考文献。略記は以下の通り。【①】:山口直治・山口良太『(書名なし)』(1930年)、【②】:『上野のあゆみ』(上野地区生涯学習推進委員会、1989年)、【③】:山形県神社庁五十周年記念事業実行委員会出版部編『山形県神社誌』(山形県神社庁、2000年)、【④】:福田アジオ他編『精選　日本民俗辞典』(吉川弘文館、2006年)、【⑤】:武田好吉監修『無言の野の語部たち　山形の石碑石仏』(日本文化社、1992年)、【⑥】:庚申懇話会『石仏調査ハンドブック』(雄山閣出版、1984年)、【⑦】:山形市市史編さん委員会・山形市市史編集委員会編『山形市史　通史編　中巻』(臨川書店、1987年)、【⑧】:総合佛教大辞典編集委員会編『総合佛教大辞典』(法藏館、2005年)、【⑨】:石井進・水藤真監修『文化財探訪クラブ⑧　石仏と石塔』(山川出版社、2001年)。

【表３】『鎮守氏神并神仏堂宮々并供養石書上帳』と現地調査の対応表

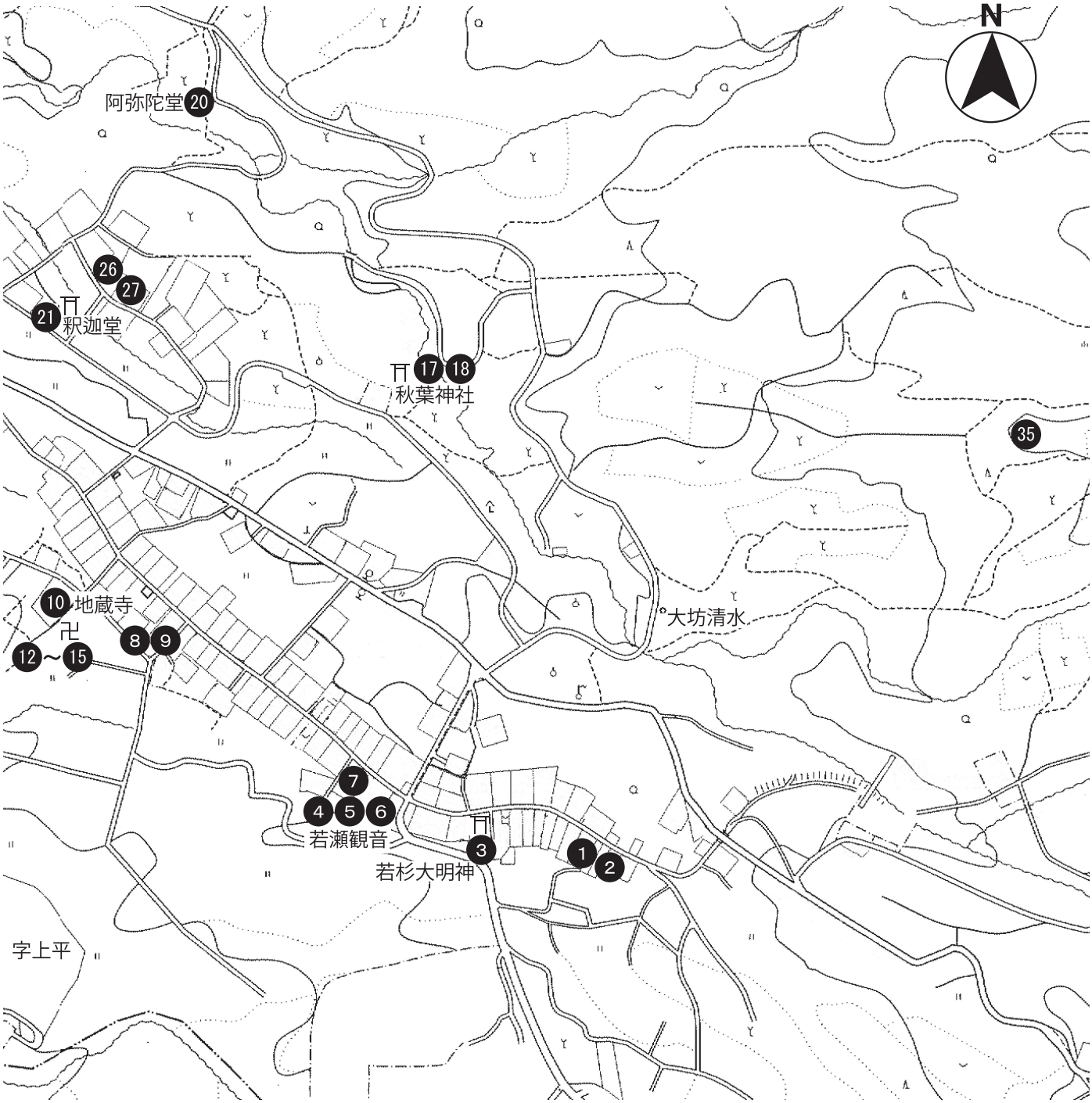
『鎮守氏神并神仏堂宮々并供養石書上帳』情報			現地調査情報	
社/石	No.	寺社名／石碑名	寺社名／石碑名	年代
寺社	3	若杉大明神	（若杉大明神）	
	4	観音堂	若瀬観音	
	10	地蔵尊	地蔵寺	
	16	天神宮	天神神社	
	17	秋葉山大権現	秋葉神社	
	18	脇立稲荷大明神	（脇立稲荷大明神）	
	19	脇立象頭山大権現	不明	
	20	阿弥陀堂	（阿弥陀堂）	
	21	釈迦堂	釈迦堂	
	22	大神宮	神明神社	
	23	太子堂	太子堂	
	35	山神堂	（山神堂）	文化 5(1808)年 9 月
石碑	1	南無阿弥陀仏供養	百万遍供養　南無阿弥陀仏	宝暦 11(1761)年 9 月 1 日
	2	馬頭観世音	馬頭観世音	安政 7(1860)年 3 月
	5	脇立庚申塔	庚申塔	安永 9(1780)年 6 月
	6	湯殿山	湯殿山	嘉永 6(1853)年 4 月 8 日
	7	南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏	宝暦 11(1761)年 7 月 15 日
	8	蔵王山	蔵王山	天保 14(1843)年 6 月 8 日
	9	南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏	宝暦 11(1761)年 10 月 15 日
	11	脇立弘法大師	不明	
	12	奉供養光明真言	奉供養光明真言百萬遍	享保 13(1728)年 7 月
	13	子待供養塔	甲子待供養	安永 9(1780)年 4 月
	14	南無地蔵大士	南無地蔵大士	
	15	湯殿山	湯殿山	享和 3(1803)年 8 月
	24	十王堂	（龍石（たついし））	
	25	湯殿山	湯殿山	安永 3(1774)年 5 月
	26	善光寺塔	善光寺塔	弘化 3(1846)年 8 月
	27	弘法大師百八十八ヶ所供養堂	奉順拝弘法大師百八十八ヶ所供養	安政 6(1859)年 8 月
	28	己巳弁天二世安楽供養塔	奉供養己巳弁天二世安楽	宝永 5(1708)年 10 月 26 日
	29	百萬遍供養塔	百萬遍供養塔	宝暦 7(1757)年
	30	象頭山	象頭山	文政 5(1822)年 7 月 10 日
	31	地蔵菩薩	（地蔵菩薩）	享保 14(1729)年 8 月
	32	庚申堂	庚申塔	寛政 12(1800)年 8 月
	33	南無阿弥陀仏供養塔	南無阿弥陀仏	宝暦 10(1760)年 10 月
	34	大乗妙典供養塔	奉納大乗妙典六十六部	延享 3(1746)年 6 月
	36	水神堂	（水神堂）	

現地調査情報	
関係者・団体	備考
世話人 名主 仁三郎	「総州佐倉家臣柏倉陣屋詰」「長谷川八百治」などとあり
講中廿人	
施主 重助、世話 弥八 など	
講中	
講中	「村中安全」とあり 人名が列記されてあり
講人中	「無縁菩」とあり
平若者中	「村中安全」とあり 「世話人」とあり、人名が列記されてあり
百万遍供養講中	
青木久富	
講中九人	
	「菴路」とあり
講中	「講中敬白　光善代」とあり
	十王堂の別当は『神仏・供養石書上帳』に「久六」とあり、「龍石」は「久六」の屋号をもつ家が管理していることから十王堂＝龍石と判断した。
八日講中	
施主 圓七妻、セハ 山ノ神 九良兵エ	
願主 円七妻	「西國坂東　四國秩父」とあり
願主 青木宗内久伯、井上勘五郎清勝 など	
講中	「小三郎」など講中と思われる名前が列記されてあり
願主ヵ方ヵ寒河江喜惣次栄岳	
	「南坂中」とあり
講中	「天下和順百万遍供養」とあり
願主 上野村 井上荘五郎	「天下大平國土安全」とあり

※『鎮守氏神并神仏堂宮々并供養石書上帳』に書き上げられた寺社・石碑と現存する寺社・石碑の対応表。「№」は【表１】と対応。「現地調査情報」の「寺社名／石碑名」のうち「寺社名」は『ゼンリン住宅地図』、「石碑名」は碑文を参考にした。これらに情報がないものは「(　)」を付し、特記しない限り『鎮守氏神并神仏堂宮々并供養石書上帳』の名称をつけた。



【図２】『鎮守氏神并神仏堂宮々并供養石書上帳』寺社・石碑分布図
（『ゼンリン住宅地図　山形県山形市①［南部］』（2018年）より作成。番号は【表１】と対応。№36は本図の範囲外であるため掲載せず）


N
阿弥陀堂 20
26
27
21 釈迦堂
17 18
秋葉神社
35
10 地蔵寺
8 9
12～15
大坊清水
7
4 5 6
若瀬観音
3
1 2
若杉大明神
字上平

【写真７】　寺社・石碑の写真一覧

No. 3　若杉大名神	No. 4　観音堂	No. 10　地蔵尊
No. 20　阿弥陀堂	No. 21　釈迦堂	No. 22　大神宮
No. 1　南無阿弥陀仏供養	No. 2　馬頭観世音	No. 5　脇立庚申塔

No. 16 天神宮

No. 17 秋葉山大権現

No. 18 脇立稲荷大明神

No. 23 太子堂

No. 35 山神堂

No. 6 湯殿山

No. 7 南無阿弥陀仏

No. 8 蔵王山

No. 9 南無阿弥陀仏	No. 12 奉供養光明真言	No. 13 子待供養塔
No. 25 湯殿山	No. 26 善光寺塔	No. 27 弘法大師 百八十八ヶ所供養堂
No. 31 地蔵菩薩	No. 32 庚申堂	No. 33 南無阿弥陀仏供養塔

No. 14 南無地蔵大士

No. 15 湯殿山

No. 24 十王堂

No. 28 己巳弁天二世安楽供養塔

No. 29 百萬遍供養塔

No. 30 象頭山

No. 34 大乗妙典供養塔

No. 36 水神堂